白井大師　番外　名内・粟島神社

1　名称　(No.033)〔平17：粟島神社〕

2　場所　白井市名内586　粟島神社

名内・東光院から道程約200m

GPS座標 35.828485882499116, 140.0618266066351

3　由緒

少彦名命を祭神とし、伝説によれば和歌山県の淡島神社を室町時代の永禄年間に、千葉氏の家臣・伊藤左馬介守胤が招来したという。かつては多くの出店のあった縁日は、夜遅くまで村中大いに賑わっていた。(「白井第二小学校区宝物マップ<今井>」より)

4　御堂　なし

5　境内　本殿と拝殿、鳥居と小さい鳥居、御堂、名内公民館などあるが、大師堂はない。

2088年や2009年頃の写真にも大師堂は見当たらない。

6　写真　(2008.12、2023.11撮影)

鳥居

拝殿

御堂

7　情報

(1) 平成17年白井大師

「白井市の民俗２」(平成18年3月白井市教育委員会) の「平成17年白井大師の取材記録」には、10月1日(土)「14時50分に今井青年館を徒歩で出発し、15時に東光院(名内)に到着した。大師堂、大師像、本堂でお勤めを行う。こからまた先達と4~5人のみ徒歩で、その他の講員は車での移動となる。粟嶋神社(名内)、工業団地内道路脇の札所(名内)を経て、15時40分に1日目の目的地である中集会所(中)に到着した。」との記述があり、「平成17年巡拝路」図 (右図) にも「粟島神社」が出ている。白井大師が休止する平成17年頃は、粟島神社は白井大師の札所だったことがわかる。

(2) コロナ禍前の東葛印旛大師

東葛印旛大師のWebサイトには、名内・今井・小名内地区の「コロナ禍前の巡行巡拝風景」の写真とともに「粟嶋神社の掛所は移設しましたので、寄りません。」との記述があります。粟嶋神社は東葛印旛大師の番外札所であったようですが、コロナ禍前にどこかに移設したようです。

(3) 昭和6年の東葛印旛大師

白井市郷土史の会のブログに昭和6年の東葛印旛大師の札所の絵図（右図はその一部）が掲載されています。これを見ると名内の東光院の南に「？太郎兵衛」という掛所が出ています。現在の東葛印旛大師には出てきませんので、もしかしたらこれが粟島神社の御大師様ということも考えられます。

(4) 名内の粟島神社

粟島神社は市内では名内地区のみに存在し、近隣でも数少ない、この地域では珍しい神社です。一般的には淡島神社とも呼ばれ、和歌山県和歌山市加太の淡島神社が総本社だと言われています。名内地区の粟島神社は元来は少名彦命(すくなひこなのみこと)を祭神とし、現在は素盞嗚命(すさのおのみこと)を合祀しています。大正4年(1915年)発行の「白井村誌」によると、この神社は戦国時代の永禄年中(1558～1570年)に、千葉氏の家臣で名内村の領主だった伊東守胤(もりたね)が、和歌山県の淡島神社の総本社から神霊を招祭してきたと伝えられています。また祭神の少名彦命は、一説には名内の地名の由来に関係しているとも言われています。粟島神社はその後、江戸時代の宝暦7年(1757年)に再建され、現在の本殿は明治40年(1907年)に改築されたものです。

淡島神社の一般的な特徴として、女性との縁が深いことが挙げられます。これは淡島神社の神が住吉神社の妃神と考えられているためで、淡島神社には婦人病や安産祈願、縁結びにご利益があるとされています。和歌山県の淡島神社では雛人形や手道具などの奉納が多くされることで知られ、針供養や雛流しが行われています。名内地区の粟島神社でも、毎年3月3日に雛人形の供養が行われています。かっては多くの人が人形を持ち込んでお焚き上げとして燃やしていましたが、現在は環境問題もあり、燃やしていません。また過去には2月8日に白井市をはじめ、柏・市川・船橋・印旛方面から針子と呼はれる裁縫職の人々が集まり、針供養も行っていました。

名内地区の粟島神社には最近、他の粟島神社にならい、小さな鳥居が建立されています。大人は腹ばいにならないと通れないほど小さな鳥居ですが、この鳥居を潜ると、さまざまなご利益があると言われています。(2009.02.15広報しろい「歴史のしずく」より)